



日本小児アレルギー学会

Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology

理事長ニュースレター

日本小児アレルギー学会第13期理事長 藤澤隆夫

2015.11.20 発行 (第2号)

はじめに

日頃は本学会に多大なるご支援を賜り、心よりお礼申し上げます。

理事・監事ならびに関連委員会/WG委員、評議員、そして会員の先生方には、さまざまな方面で学会活動の発展にご尽力いただいているところですが、ここにニュースレター第2号をお届けして、先生方による活動成果のアップデートをさせていただきます。

2014年11月から2015年1月までの3ヶ月間の活動は第1号でご報告申し上げましたので、第2号では2015年2月から11月(上旬)までの10ヶ月間をカバーいたします。

日本小児アレルギー学会設立50年記念シンポジウム開催 2015年7月20日

本学会は1966年(昭和41年)4月に設立されました。その後、多くの先輩方の努力で発展、2015年に設立50年目を迎えました。本学会の活動を広く知っていただくこと、とくに本年12月施行の「アレルギー疾患対策基本法」にもとづく政策推進を社会にアピールすることを目的に記念シンポジウムを開催いたしました(50年記念シンポ WG:海老澤元宏委員長)。当日は、一般の方々に加え、多くの会員の先生がたにもご参加いただき、会場の一橋講堂は400名近くの参加者で熱気に溢れました。講演の動画と朝日新聞に掲載された記事のPDFがそれぞれ学会ホームページからご覧になれますので、ぜひどうぞ。



第1部 講演	
講演 1 13:05~13:25	小児気管支喘息治療の進歩とこれからの展望 司会: 藤川 昭廣 (北関東アレルギー研究所長/群馬大学名誉教授) 演者: 藤川 浩一 (群馬大学大学院医学系研究科小児科学教授)
講演 2 13:25~13:45	食物アレルギー対策の進歩とこれからの展望 司会: 近藤 直実 (平塚産業短期大学学長/岐阜大学名誉教授) 演者: 海老澤 元宏 (国立病院機構柏根基幹病院臨床研究センターアレルギー性疾患研究部長)
講演 3 13:45~14:05	小児アレルギー疾患のトータルケア 司会: 奥弓 光文 (横浜大学学長) 演者: 下塚 直樹 (千葉大学大学院医学研究科小児病態学教授)
第2部 パネルディスカッション	
こどもたちの健やかな成長を支えるために：アレルギーを克服する新しい健康日本 司会: 西岡 三穂 (国立病院機構柏根基幹病院名誉院長) 藤澤 隆夫 (日本小児アレルギー学会理事長)	
基調講演 1 14:30~14:40	アレルギー疾患対策基本法の施行に向けて 前田 彰久 (厚生労働省健康局疾病対策課課長補佐)
基調講演 2 14:40~14:50	学校給食における食物アレルギーの対応 竹林 敏之 (文部科学省学校健康教育部健康教育企画室室長)
基調講演 3 14:50~15:00	環境と子どもたちの健康 新田 裕史 (国立環境研究所エコシステム調査センターセンター長代行)
パネルディスカッション 15:00~15:00	パネリスト 藤部 まり子 (NPO法人アレルギーを考える母の会代表) 藤澤 博久 (日本小児アレルギー学会理事長) 歌澤 晃 (日本小児アレルギー学会・アレルギー学会理事長) 基調講演の先生方

臨床研究支援セミナー開催 2015年9月19-20日

Clinical Research Supporting Seminar (CReSS)

日頃、会員の先生方には積極的に臨床研究に取り組んでいただき、世界に通用する論文も多く出てきましたが、せっかく良い視点をお持ちにも関わらず、臨床研究の「作法」をご存じないために、成果に結びつきにくい方もおられます。そこで、臨床研究の最新の手法を系統的に学んで質の高い研究に結実させていただくために、さまざまナリサーチクエストションをおもちの先生を対象に、臨床研究支援セミナー(CReSS)を開催しました(CReSS WG: 勝沼俊雄委員長)。

セミナーでは7名の一流講師を招き、臨床研究の基本から実施のノウハウまで充実した講義をいただきました。56名の参加がありましたが、「模擬」研究計画をグループで討議してブラッシュアップするワークショップも行い、熱心なディスカッションの中でたくさんの方の事を学んでいただけたかと思えます。本セミナーはこれからも継続して、2016年8月21-22日に開催予定です。どうか奮ってご参加ください。

その他にも、論文の書き方を学ぶ「Medical Writing Seminar」も企画中です。詳細決定しましたら、お知らせしますので、お楽しみに。

第1回 CReSS プログラム

9月19日(土)

12:30 - 12:50	小テスト実施
13:00 - 13:05	開会挨拶
13:05 - 14:00	<u>クリニカルクエストションから研究デザインを構築する</u> 佐古まゆみ先生(国立成育医療研究センター臨床試験進室)
14:00 - 15:00	<u>クリニカルクエストションから研究計画を構築する 実践・経験談</u> 勝沼俊雄(東京慈恵会医科大学附属第三病院小児科)
15:00 - 15:30	休憩
15:30 - 16:30	<u>研究デザイン(種類と特徴)とバイアス・交絡</u> 松島雅人先生(東京慈恵会医科大学臨床疫学研究所)
16:30 - 17:30	<u>研究倫理の基本-倫理指針を中心に-</u> 薄井紀子先生(東京慈恵会医科大学附属第三病院輸血部)
17:30 - 18:25	<u>臨床研究と生物統計学</u> 大橋靖雄先生(中央大学理工学部人間総合理工学科)
18:30 - 19:30	<u>研究計画作成開始(個人/グループ)</u> 夕食・懇親会

9月20日(日)

09:00 - 10:00	<u>臨床研究実施のピットフォール</u> 小林徹先生(国立成育医療研究センター臨床研究企画室)
10:00 - 10:45	<u>評価者から見た「魅力ある研究計画書」とは?</u> 西間三馨先生(国立病院機構福岡病院)
10:50 - 11:00	小テストの理解度確認
11:00 - 12:00	研究計画総仕上げ
12:00 - 14:30	昼食・模擬研究計画発表会(各グループ25分)
14:30 - 14:45	閉会の挨拶、修了証書の交付

日本小児アレルギー学会「支援研究」公募

わが国の小児アレルギー分野の臨床研究を推進し、日本発のエビデンスを創出していくため、会員の行う独創的な観察・調査研究および介入研究の支援のための研究費を設けました(研究推進委員会: 下条直樹委員長)。これまで学会からの研究費補助の仕組みとし

てありました「学会主導研究」を改訂して、より若手支援に重点をおきながら、大型の競争的研究費獲得のための準備資金としての申請も認めることとなりました。平成 27 年度募集分は 10 月 9 日に締め切りましたが、CReSS ご参加の先生方からもご応募いただき、ひとつの採択枠に対して 6 題とたいへん狭き門となりました。いずれも質の高い研究計画で、現在、研究推進委員会において厳正に審査を進めています。

日本小児アレルギー学会紹介パンフレット発行

学会の活動を広く知っていただくために、学会紹介パンフレットを作成しました。広報 WG (赤澤晃委員長) の先生方には、短い作成期間にも関わらず、たいへんご尽力を賜り、美しくわかりやすい小冊子として完成していただきました。

内容は主に一般の方向けとなっておりますが、学会活動の概要もわかりますので、小児アレルギーに興味をお持ちの若手医師やその他の職種の方々へのご紹介にも使えます。

ぜひご活用をお願いいたします。すでに理事、評議員の先生方には送付させていただきましたが、どなたでもご入り用の際は、必要分をすぐにお送りしますので、事務局まで申し付けください。今後、本学会学術集會はもちろん、日本小児科学会、日本アレルギー学会、日本小児難治喘息アレルギー疾患学会などで配布させていただく予定です。



成長・発達の中での小児アレルギー疾患と学会の取り組み

アレルギーってなんでしょ
食物や花粉、ハウスダスト・ペットなどの環境物質に対して、免疫システムが過剰に反応し、じんましん、結核、喘息、アトピー性鼻炎など体に好ましくない症状が起こる反応です。

アレルギー疾患はどうして起こるのしょう
アレルギーが起こりやすい体質のある人が、原因となる物質であるアレルゲンと接触することで発症します。食物との接触で起こるのが食物アレルギーです。喘息は、ハウスダスト、ペットなどの環境中にウイルス感染も加わって発症します。アレルギー性鼻炎・結膜炎は、ハウスダストの他に花粉症、百日咳の発症で発症します。子どもは成長に伴ってさまざまなアレルゲンと接触することにより食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、喘息、アレルギー性鼻炎・結膜炎を発症していきます。これを「アレルギー＝病」と呼びます。

アレルギー疾患の治療はどうしたらよいでしょう
アレルギー疾患になった場合は、原因となるアレルゲンを避けて避けることと、適切な薬物を使用してアレルギー反応を抑えることが必要となります。原因となるアレルゲンを使用しない「アレルゲン免疫療法」という、アレルギーが起こりやすい体質自体を変えてしまう根本的な治療方法が実用化されてきました。さらには、予防的にアレルゲンを除去する必要性の是非に関しても研究が進んでいます。

喘息
乳児喘息(2歳未満)は多発です
学会では、2歳までに発症した喘息を「乳児喘息」と呼んでいます。これは、気管支の構造や免疫系の発達の未熟な状態のため、ウイルス感染などでも発症しやすいことがありますが、発症年齢に即断して機能的に治療を開始することで、重症化や乳児喘息による喘息発作死は有意に減少しました。

食物アレルギー
新生児・乳児消化管アレルギー
新生児・乳児期に、人工乳がアレルゲンとなる腸管免疫のアレルギー反応により、血便や腸管性の下痢がみられる疾患です。病態は重症になることもあり、重症化に至ると腸管炎、腸管狭窄、腸管閉塞、腸管穿孔の研究が進められています。

アトピー性皮膚炎
乳幼児のアトピー性皮膚炎
この時期のアトピー性皮膚炎は、かゆみのある赤みやじくじくを伴う腫、痒、腫脹の発症がみられます。皮膚のバリア機能が低下したところに、さまざまな刺激や食物アレルギーが原因となって発症します。治療として保湿ケア、保湿剤、外用薬、保湿剤の併用が有効とされています。自然寛解するといわれています。

情報発信・啓発活動
アレルギーの研究・臨床を通じて得られた成果を医療に生かすために情報発信・啓発活動を進めています。

研究推進
科学的根拠に基づいた医療を推進するために質の高い臨床研究を支援するとともにその基盤整備を行います。

関連学会・行政との連携
アレルギー疾患対策推進のために日本アレルギー学会、日本小児科学会、日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会など関連学会、行政機関と連携しています。

出版物
会員の研究成果を掲載した学会誌や、科学的根拠に基づいた診療ガイドラインなど多くの出版物を作成しています。

ガイドライン改訂の方向性

本学会が発行する二つの診療ガイドライン、「小児気管支喘息治療・管理ガイドライン」と「食物アレルギー診療ガイドライン」改訂の方向性が、2015年4月17日に行われた理事会において決定されました。

いずれも、今後は国際的にも認められる Evidence-based Medicine の手順に則ることとなり、具体的には公益財団法人日本医療評価機構 EBM 医療情報部が提案する Minds の手法を採用します。ただし、食物アレルギーについては 2016 年の発行を目指して、すでに改訂作業を進めていますので、次の 2016 年版はエビデンスを取り入れながらも従来の手法をとります(食物アレルギー委員会：海老澤元宏委員長)。喘息は、2017 年の発行を目指して、現在、作成組織を整備しており、これから改訂作業に入ることとなりました(ガイドライン委員会：荒川浩一委員長)。

小児気管支喘息治療・管理ガイドライン 2017 作成組織

1) ガイドライン統括委員会

：ガイドライン作成の統括を行う

現理事が担当

2) ガイドライン作成委員会

：スコープ(ガイドライン作成の企画書)、CQ(クリニカルクエスチョン)を作成し、システマティックレビューに基づいた治療の推奨を決定、ガイドライン本文の執筆を行う。

現ガイドライン委員に以下の外部委員を加える

- ・日本アレルギー学会推薦の成人喘息専門医
- ・日本外来小児科学会推薦のプライマリーケア小児科医
- ・日本小児呼吸器学会推薦の小児呼吸器専門医
- ・日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会推薦のコメディカルの方
- ・患者会代表

3) システマティックレビュー委員会

：CQ に対して文献検索を行い、エビデンスの総体評価を行う。

委員は公募とする。一定の研究業績をもつ本学会の若手会員。

ガイドライン作成にあたっては、以下のようなリソースが参考にさせていただきます。

1. 「Minds 診療ガイドライン作成の手引き 2014」医学書院
2. 「Minds 診療ガイドライン作成マニュアル」… ウェブよりダウンロードできます。
URL : <http://minds4.jcqh.or.jp/minds/guideline/manual.html>
3. その他のガイドライン作成/評価ツールは以下よりダウンロードできます。
URL : http://minds.jcqh.or.jp/n/st_1.php?page=23#
4. Minds のイベントも参考になりますので、それぞれお申し込みください。
URL : <http://minds4.jcqh.or.jp/resource/event.html>
5. システマティックレビュー委員の先生方には学会主催のセミナーを予定します。

災害派遣医療スタッフ向けアレルギー児対応マニュアル

これまで災害対応WG（足立雄一委員長）では、災害時に避難所などでの生活を余儀なくされる被災アレルギー児や家族、現場での支援関係者にご利用いただけるよう、「災害時のこどものアレルギー疾患対応パンフレット」を作成し、自治体やボランティア組織などに配布してきました。そして今回は、発災後早期に派遣されるDMATなどの医療スタッフがアレルギー児の応急対応を行う際に、迅速で適切な処置や指導ができることを目的として、「災害派遣医療スタッフ向けのアレルギー児対応マニュアル」を作成しました。

このマニュアルは、全国の行政機関などに送付いたしましたが、当学会HP（以下）からご自由にダウンロードいただけるようになっています。災害派遣医療スタッフのみならず、災害拠点病院や救急指定病院の医療スタッフの皆さまにも、いざという時にご活用いただけましたら幸いです。

また、全国の自治体向けに「大規模災害対策におけるアレルギー用食品の備蓄に関する提案」も作成して、担当部署へ送付いたしました。これもホームページからダウンロードできるようになっています。



(2011年5月発行)



(2015年7月発行)

2015年秋 喘息発作の多発？

今年8月末頃から9月をピークに、全国各地で喘息様症状を呈する下気道炎患者が急増し、中にはICU入室、人工呼吸管理が必要となる急性呼吸不全症例が発生、一部の症例からはエンテロウイルスD68（EV-D68）が検出されたとの報告がありました¹⁻⁴⁾。

エンテロウイルス属には、ポリオウイルスや、無菌性髄膜炎の原因となるエコーウイルスや手足口病の原因となりうるエンテロウイルス（EV）71型、そして感冒の原因さらに喘息の増悪・発症に関わるライノウイルスも含まれます。

EV-D68 はエンテロウイルス D に属し、ライノウイルスに類似、発熱や鼻汁、咳といった軽度なことから喘息様発作、呼吸困難等の重度の症状を伴う肺炎を含む様々な呼吸器疾患を引き起こします。さらに、急性弛緩性麻痺（AFP）を発症した患者の上気道から EV-D68 が検出されたとの報告が欧米や日本などから行われており、その因果関係が強く疑われています⁴⁾。すでに、日本小児神経学会は AFP に関する緊急の疫学調査を開始していますが、今年の喘息発作急増も EV-D68 の関与が疑われるため、急ぎ疫学調査が必要と考えられます。しかし、喘息発作入院のベースラインデータがないため、現時点では、今年を全国的な多発とする根拠がありません。

そこで、理事会の先生方に緊急協議をいただきまして、まずは、全国的な喘息入院症例の後方視的疫学調査を行うこととしました。今年を多発とする根拠を明らかにして、今後のさらなる調査につなげることを目的としています。担当理事として、是松聖悟理事、岡田賢司理事をお願いしまして、現在、調査を開始いただいておりますので、会員の皆様にはぜひともご協力賜れば幸いです。

調査用紙は学会ホームページよりダウンロードできます。どうかよろしく願いいたします。

1. 伊藤健太, 他. エンテロウイルス D68 型が検出された小児 4 症例—東京都 (IASR)
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/entero/entero-iasrs/5966-pr4281.html>
2. 幾瀬樹 他 気管支喘息発作の急増とエンテロウイルス D68 型陽性—鶴岡市 (IASR)
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/id/2335-disease-based/a/ev-d68/idsc/iasr-news/6046-pr4302.html>
3. 伊藤卓洋 他 2015 年秋における小児の喘息発作入院増加とエンテロウイルス D68 型流行との関連—三重県津市 (IASR)
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/id/2335-disease-based/a/ev-d68/idsc/iasr-news/6080-pr4303.html>
4. 豊福悦史, 他. エンテロウイルス D68 型が検出された、急性弛緩性脊髄炎を含む 8 症例—さいたま市 (IASR)
<http://www.nih.go.jp/niid/ja/id/683-disease-based/a/entero/idsc/iasr-news/6004-pr4286.html>

緊急フォーラム「Enterovirus D68 流行と喘息増悪について考える」

2015 年 11 月 21 日-22 日に南部光彦会長（天理よろず相談所病院）の下、第 52 回日本小児アレルギー学会が奈良市で開催されますが、以上の状況をふまえて、南部会長の特別のご配慮により、下記の緊急フォーラムが開催されることとなりました。

日時：2015 年 11 月 22 日 14:15～15:05 第 4 会場（ホテル日航奈良）

座長 三浦克志（宮城県立こども病院アレルギー科）

岡田賢司（福岡歯科大学総合医学講座小児科学分野）

1 2015 年、喘息発作は増えたのか？

1-1 愛知県から 杉浦至郎（あいち小児保健医療総合センターアレルギー科）

1-2 三重県津市から 長尾みづほ（国立病院機構三重病院アレルギーセンター）

② 2010 年 EVD68 流行と喘息増悪 - 山口県から

長谷川俊史（山口大学大学院医学系研究科小児科学分野）

③ 2006 年 Hopkins 症候群の 1 例 - 9 年の臨床経過

中村晴奈（国立病院機構三重病院小児科）

④ 日本小児アレルギー学会による全国調査とその意義

是松聖悟（大分大学医学部地域医療・小児科分野）

第 13 期理事会メール審議一覧(2015 年 4 月～2015 年 11 月)

2015 年 4 月以降にお願いしましたメール審議課題の一覧です。

内容に関しまして、ご質問がございましたら、事務局までお問い合わせください。

- No. 11 20150430 災害派遣医療スタッフ向けアレルギー児対応マニュアル最終案について
詳細は前記の通りです。
- No. 12 20150626 学会紹介パンフレット最終案について
詳細は前記の通りです。
- No. 13-1 20151023 喘息発作多発に関する調査について
詳細は前記の通りです。
- No. 13-2 20151030 エンテロウイルス D68 流行期における重症喘息発作例調査(案)について
詳細は前記の通りです。
- No. 14 20151021 予防接種ガイドライン中の見解について 日本小児科学会からの依頼
いただいたご意見をまとめて、提出しました。
- No. 15 20151113 小児気管支喘息・治療管理ガイドライン改訂について
詳細は前記の通りです。

編集後記

2015 年 4 月以降の学会活動について、主だったことを報告させていただきました。

ニュースレター第 1 号は、2014 年 11 月の第 13 期発足後、矢継ぎ早にお願いしました多くの理事会メール審議で、やや「わかりにくさ」を生じた面もあるとかとの反省のもと、審議事項のサマリーとして発行させていただきました。

その後、いくつかのイベントも先生方のお力により無事済ませることができましたので、今回は学会の活動報告という意味合いで、前回は理事、監事、各種委員会/WG の委員長・副委員長の先生方にお配りしたものを、今回、評議員の先生方にも向けて、第 2 号として作成いたしました。

今年は「アレルギー疾患対策基本法」が施行される年です。しかし、残念ながら現時点までには行政に目立った動きはみえません。法律が条文だけにおわらず、具体的に患者さんや社会に益となる施策へ結びつくためには、本学会の積極的な活動もたいせつになるのではないかと存じ、これまで微力ながらも努力をしてみりました。

今、第 13 期の 1 年目がなんとか無事に過ぎようとするにあたり、役員、会員の諸先生方、とくに、多くの業務に労してくださっている事務局の方に心よりお礼を申し上げます。次々と花火を上げようとする新理事長が至らざるご迷惑をおかけしておりますことも多々あろうかと存じますが、どうかお許しください。

たいせつなことは、「皆の力で作る学会」と存じております。皆様のために働く理事長となるよう、要所で鞭を入れていただきながら、明日に向けてのご提案、忌憚のないご意見を引き続き賜りますよう、今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。